

## ■ 期待高まる！一段の円安・ドル高&amp;日本株高

先週末、つまり9月末のドル/円は、ついに月足・終値で一目均衡表の月足「雲」上限を上抜けることとなった。前回更新分の本欄でも想定したように、そこからドル/円の上方視界は大きく開ける格好となった模様であり、すでに7月高値=113.18円や年初来高値=113.40円などを次々と上抜け、足下では114円台半ばまで一気に上値を伸ばす展開となっている。

続くターゲットは昨年11月高値=114.73円ということになるが、足下では米10年債利回りが3.18%台まで上昇してきているうえ、NYダウ平均が連日のように史上最高値を更新するといった状況にもなっており、むしろ相場は一足飛びに115円台乗せを意識した展開となる可能性も十分にあると言えそうである。

少し振り返れば、ドル円が足下の強気トレンドを本格的に描き始めるようになったのは、9/13に日足「雲」上限を上抜けてからのことであった。9/13と言えば、トルコ中銀が政策決定会合において大幅利上げ(17.75%から24.00%へ)を決定した時であり、結果、新興国通貨危機に対する警戒感が大きく後退したことで、市場全体のリスク選好ムードはやや回復しはじめた。

もちろん、相前後して中国人民元(対ドル)や上海総合株価指数などが下げ止まり、やや反発する動きを見せるようになったことも見逃せない。周知のとおり、米トランプ政権は9月17日に対中制裁関税の第3弾を24日に発動すると発表し、ほどなく中国側も報復関税を発動することを決めた。そして、このニュースが世界を一巡りした頃から「リスクオフの材料出尽くし」であるとか「両国経済に当初懸念されたほどの悪影響は及ばない」、「米国によって貿易戦争の標的とされた国の通貨は安くなる」などといった声が市場で頻繁に聞かれ始めるようになったのである。こうした見方は、いずれもドル高・円安支持派にとって“いいところ取り”である。

同時に、日本株の大幅な上昇もドル高・円安の流れを支える見逃せない要因となった。振り返ると、日経平均株価は9/7に一時2万2172円まで下押しした後に反発し、そこからは基本強気の展開が続いて10/2には一時2万4448円まで上値を伸ばすこととなった。この間、僅か1ヶ月足らずで2200円強という驚異的な上昇であった。

巷では「日経平均株価が27年ぶりの高値水準に到達した」と大騒ぎであるが、それでもなお割安な状態にあるという事実には変わりがない。主知のとおり、日経平均株価の足下の「株価収益率(PER)」は14倍弱であり、9月初旬ごろまで確認されていた13倍割れの水準に比べれば随分上昇したが、リーマンショック以降の過去の平均的水準(大よそ13.5倍から16.5倍)に照らせば、まだまだ低い方の水準である。

まして足下の水準というのは、基本的に2018年4-6月期末時点までにおける過度に控えめな会社予想(通期業績予想)に基づいて弾き出されたものである。思えば、6月末当時というのは1ドル=110.69円という状況下で米中通商摩擦の行方が大いに警戒されていた頃であり、なおかつ「今期もまだ第1四半期しか経過していない段階」であったことから、自ずと会社予想が控えめに出されることになったのも無理はない。

その意味で、この10月下旬から発表が相次ぐこととなる9月中間期末決算では、諸般の事情が好転してきていることを鑑みて、従来の通期予想を大きく上方修正してくるケースが後を絶たなくなるのではないかと推察される。そうなれば、まずは日経平均構成銘柄の予想EPS(1株当たり純利益)の平均値自体がグンと引き上がり、足下の日経平均株価の割安感は一層強まる。

かねて「米中間選挙の年は年末株高になる」とのアノマリーがあるが、今年はそれを地で行くこととなる公算が大きい。筆者は個人的に、日経平均株価が年末までに2万6000円処まで値を上げる可能性は大いにありと見ており、そうであるとするならばドル/円も115円処の節目を通過した後に、昨年1月高値=118.61円が意識される展開となってもおかしくはないものと思われる。

(10月04日 10:20)